

愛知教育大学の立地と自然環境の変化

本学は、刈谷市のほぼ最北部の丘陵上に位置しています。本学の最高標高地点（北門から入り心理教育相談室前の坂を登り詰めた地点）で、最低の正門付近との標高差は約17mとなっています。本学がこの井ヶ谷の地に統合移転をしたのは、1970年のことです。統合以前(1963年)と統合後10年が経過した時点(1980年)とを比べた本学とその周辺環境の変化を記載します。

当地域は、猿投山南西麓古窯跡群の一部をなし、大学構内には傾斜地を利用した半地下式^{コウ}の窰形式を持つ奈良朝様式の須恵器の古窯として5基、その後の時代のもの8基、計13基の窰跡があります。多くの窰が造成されたのは、もともとこの地区の地形が丸みを帯びたなだらかな丘陵性の地形であったためです。大学の移転によって大きく地形が変化したのは、現在のグラウンドと大学の主要な建物が配置されている地区及び附属高校の地区です。グラウンド部分のはかつては、広沢池を水源とする水田が分布する谷地形をしていましたが、グラウンドの造成により埋め立てられました。また建物造成地の多くはかつては、緩やかな起伏を呈していましたが、削られたり埋められたりして平坦な地形となりました。もとの谷地形の名残は、プールの位置する部分の谷や第二人文棟南側の谷（現在は駐車場）及びアイソトープ実験施設北側の谷（現在は竹林）などに見られるに過ぎません。植生環境に目を向けると、かつての農業的土地利用はまったく見られなくなりました。かつては普通畑で小麦、サツマイモ、大根などが主に作られ、果樹としては柿が大部分だったようです。現在、障害児教育棟北側に数本の柿の木が残っています。茶畑も一部ありましたが、現在では文化系サークルのクラブハウス付近に散見される程度です。それに対してかつての森林は、本学ではできる限り森林を残そうとしてきたため、各所にその名残を見ることが出来ます。それらは附属図書館・人文情報棟や体育館の西側の一角、洲原池に半島のように突き出た自然観察園から大学会館へかけての一角、音楽演習棟南側一角、井ヶ谷住宅と本部棟との間などにみられます。大学のある井ヶ谷丘陵は、東濃から三河にかけて続く日本最大の禿げ山地帯の一つで、植生の特徴はアイグロマトツの矮性林とツツジ類・コナラ・ハンノキ等にススキが単調に生育するのみでした。禿げ山の成因は、古窯跡群の存在や入会山として住民の燃料源として利用されて来たことなどにあります。それでも森林の少ない刈谷市内にあって井ヶ谷地区は、1955年時点では林野率が14.2%と市内で最も高く、畑地率も55%と最高でした。これらの森林はマツ・コナラ・アベマキ類を主とする雑木林です。その他、春には点在するサクラが目を楽しませてくれ、秋にはクリの実を拾うことも出来ます。

統合移転後約40年弱が経過し、木々はさらに大きくなりました。これらの森林はかつては至る所に見られたいわゆる里山景観であり、近代以前においては村の入会林等として、薪・用材の採取地として利用されてきた地域の共有財産でした。少なくなったとはいえ、現在は大学の財産として貴重な自然であり、キャンパスに潤いと安らぎを与えてくれています。



敷地調査時の写真



図書館より玄関ロータリーを望む



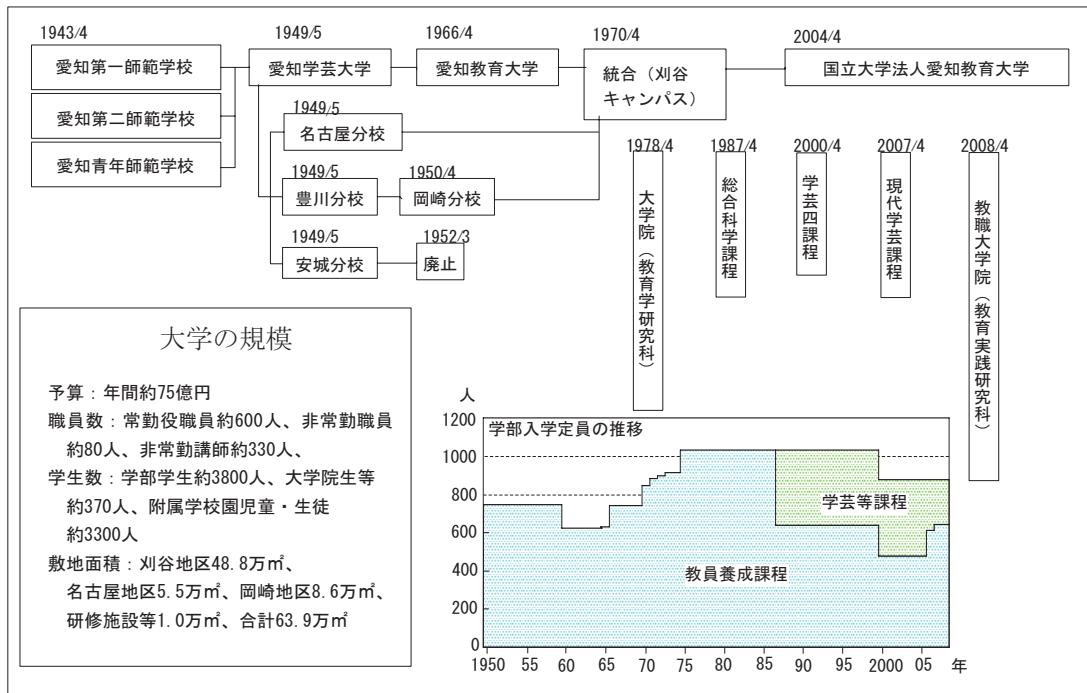
構内のカスミザクラ



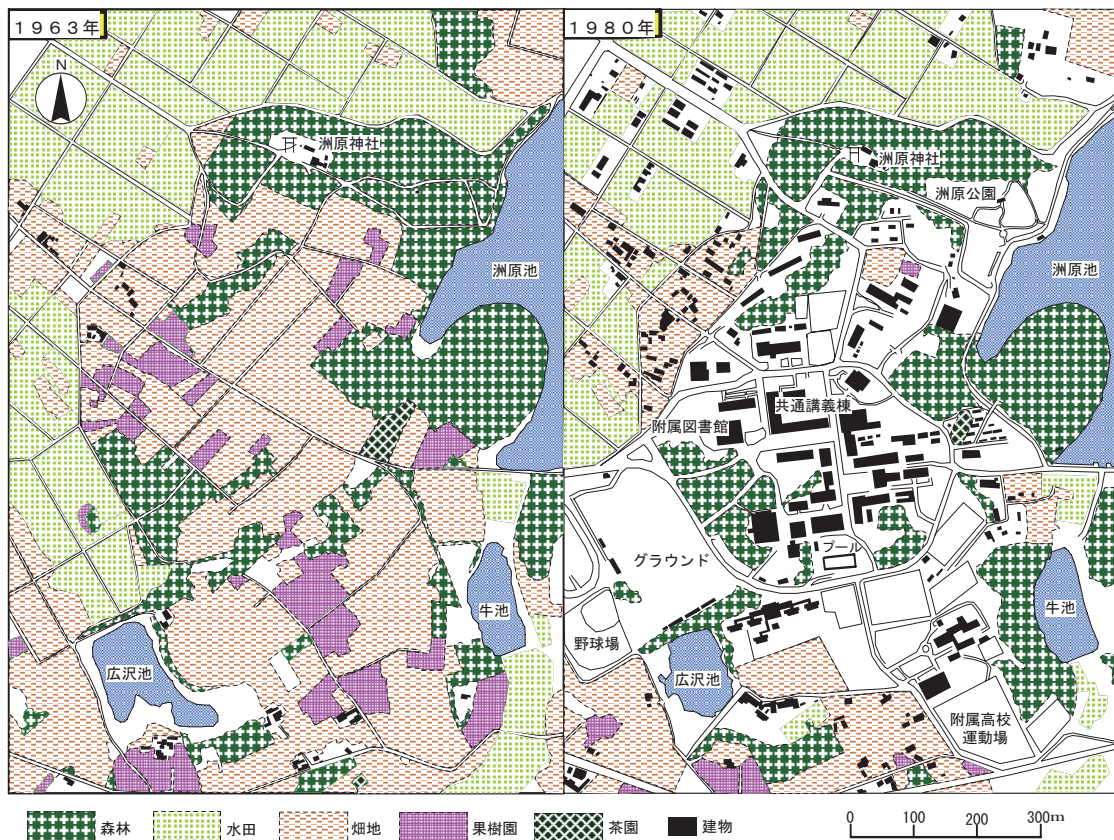
古窯跡から出土した壺



構内のエドヒガン



大学の沿革・規模及び学生定員の推移



森山昭雄氏（1987）による原図をもとに作成

愛知教育大学とその周辺地域の土地利用の変化（1963～1980年）